

アメリカのコミュニティ・
カレッジと遠隔教育

館 昭

「過疎」にして豊かな国

アメリカには丸い畑がある。高高度を飛ぶ飛行機から、幹状の道路で結ばれたこの巨大な丸い畑の列は、まるでUFOの基地であるかのように見える。勿論それは、まっ平らな土地にあの不器用窮まり無いスプリンクラーで水をやるため他ならない。広大な土地、少ない人手が、可耕地は隅の隅まで利用してきた日本では考えられないような、土地利用法を生んでいるのである。

日本は約1億2千万の人口に対して土地面積は約38万 km^2 、アメリカは2億3千万の人口をようするものの、国土は日本の25倍にあたる936万 km^2 である。人口密度にすると、日本の1 km^2 当り314人に対して、アメリカはたったの25人ということになる。この25という数値は日本人の経験をはるかにこえている。なぜなら、日本一人口密度の低い北海道でさえ、71人で、約3倍も人が住んでいるのである。過疎の代表のイメージの強い鳥取県のその数値は173で、大都市ニューヨークのあるニューヨーク州の138人よりはるかに高い。逆にアメリカ50州のうち、北海道より人口密度が高い州は10州で、日本の全国平均より高いのは僅かに2州しかない。最高でも372人で、東京の5,386人とはくらべものにもならない。

「『過疎』にして豊か」、アメリカという国を、そしてその教育

を考えると、この条件だけではどうしても頭に入れておかなければならない。すなわち日本の標準でいえば、アメリカはまぎれもなく「過疎」の国である。

しかしそれはアメリカ的文脈では過疎ではない。日本の文脈では、過疎は経済的低位と結びつく。しかし、人口密度60人/km²のカリフォルニア州は、世界的にみても最も豊かな地域の一つである。つまりアメリカは、疎の国ではあっても、過疎の国ではない。本土だけで東西に時差3時間、亜熱帯から亜寒帯にまたがる広大な国土。そしてそこに散在する、高い教育を求める人々の存在。それがアメリカに発達したコミュニティ・カレッジを理解する上での前提である。

コミュニティ・カレッジ

過疎とも言えるほどに散在する、しかも一定の豊さを背景に、高度な教育を求める人々の存在。まさにこれがアメリカにコミュニティ・カレッジと呼ばれる独自の高等教育機関を生み出した。公立の地域短期大学、つまりコミュニティ・カレッジは現在1千校以上存在し、在学者数は正規学生だけで約4百50万人にのぼる。この機関の伝統的な部門が、トランスファーと呼ばれる四年制大学の3年次への編入コースである。大学の前期2年は、日本の教養課程と同様、高等普通教育を主体とする期間であり、専門教育を主とする後期2年とは切離しが可能である。4年制大学は数も限られ、おのずから遠隔地にある。だから経済的理由からも、また少しでも長く子供を親許に置きたいという理由からも、大学の前期2年は地域の通学可能な学校でという要求がでてくるのである。

コミュニティ・カレッジは1960年代から70年代にかけて爆発的に拡大した。学生数にして約57万人から450万人へと、8

倍の増加である。そしてその主役は、職業技術課程の拡大であった。地域の職業構造の変化と、医療技術の高度化等によって生じた準専門職的な訓練ニーズがその背景にあった。そして現在では、学生数において、大学編入課程を凌駕している。さらには、コミュニティ・カレッジはコミュニティ教育とか文化プログラムとよばれる、日本のカルチャー・センターのようなサービスや、高校までの課程の補習教育までもこなしている。

何故こうした種々の機能が、一つの機関に集中しなければならないのか。その理由の最大のもの、やはり「過疎」にある。人口の分散した地域では、機能に応じて機関を複数設置することは効率が悪いのである。異なる目的の人々が、施設設備さらには人材を共有してはじめて経営が成り立つ。一方広大な土地が、こうした総合的な施設の設置を可能にする。コミュニティ・カレッジは、「過疎にして豊か」という、まさにアメリカ的条件のもとに生まれた機関とすることができよう。

カークウッド遠隔教育システム

さて、コミュニティ・カレッジがアメリカ的ならば、遠隔教育もまたアメリカ的なものの代表である。この国では、広大な国土に散在する人々の生活を経済をそして政治を成り立たせるために、実際に人と物を運ぶ交通手段とならんで、情報を流通させる遠隔通信システムもまた高度に発達させてきた。今日我々がニューメディアといっている実験にきょうしているものの大部分は、アメリカでは、すでに日常の生活手段である。CATVしかり、VANしかりである。そして遠距離通信技術の教育利用もすっかり実用段階にある。そして当然この二つのアメリカ的なものの結合も進んでいる。今、その具体例を、カークウッド・コミュニティ・カレッジにみてみよう。

カークウッド・コミュニティ・カレッジは、アメリカ中部のアイオワ州シーダラピッツにある典型的な総合制短期大学である。その設立は1966年で、以来プログラムの質と革新的な教授技術の開発で、全米的にも注目を集める地位に立っている。その開設する遠隔教育システムがKTS、すなわちカークウッド・テレコミュニケーション・システムである。カークウッド・カレッジのサービスする校区は七つのカウンティからなる、4,300平方マイル、なんと岐阜県よりすこし広い地域である。もっともその人口は35万人で、岐阜県196万人の5分の1にもならないのだが。したがって、このカレッジが、住民の通学可能範囲に教育を展開するためには、遠隔通信システムの力を借りなければならないのである。

KTSは、およそ3つのシステムの統合体である。その第1がテレリンクと呼ばれるもので、本校のシーダラピッツと6カウンティ、7つの学習センターをマイクロウェーブで結んでいる。情報は双方向の映像および音声シグナルで、これによって学生は通学範囲にある学習センターで、本校の授業を直接に受けられるのである。

第2のものはITFS、教育テレビ固定サービスである。このシステムでは、6個所の中継局を介して校区内のほとんどの地域にテレビ電波を送ることができる。これも映像と音声または音声単独の双方向通信が可能である。これの受信用のアンテナを備えてプログラムを利用している機関としては、高等学校や感化院等がある。これによって高校では、自校では用意できない授業が開設でき、特別の生徒のために大学レベルのコースも開くことができる。また感化院では、これによって大学レベルのコースを生徒たちに用意してやることができる。第3はカークウッド・ケーブル・ネットワークである。この有線網によって、学生は家庭にいながらカレッジの授業を受けることができる。このコースも、単位取得が可能で、この場合は、「非伝統的學生プログラム」の一環として運営されることになる。

日本への示唆

以上でコミュニティ・カレッジを、そして遠隔教育システムを発達させてきたアメリカ的条件とも言うべきものについて考察してきた。「過疎」に対して「過密」、このアメリカと日本の条件の違いが、確かに同じく高度な教育需要を持つ我国に、その対応物を成長させなかった大きな要因であることは間違いない。しかし、今後ともこの条件は、日本における公立の短期教育機関と、遠隔教育システムの発達を阻害しつづけるであろうか。

答えは否である。その理由の一つは、日本の過疎地の存在であり、これがこの両者を結合したシステムの潜在的需要者だからである。都市部の過密が、実は広大な過疎地を背後に生み出してきた。そして、群小の島々や山間部からなるこれらの地域は、交通手段の確保の困難な地域に他ならない。また、今後の産業構造の変動と高齢社会化にともなって発生する短期高等教育需要の拡大が、その機会均等な供給と、個人と社会の両者からのコスト低減の要求として現れてくる。これに対応できるものとしては、公費のサポートを受けた遠隔教育システムをおいて他にない。そして、さらにより積極的な理由が存在する。つまり、メディア・リテラシーを身に付けた世代が、より効率的な教育媒体として、短期の遠隔教育システムを選び、自己の生涯教育の一環として位置づける時代が遠からずやってくるからである。極端に条件が違ってみえるアメリカの経験が、実は日本の高等教育の今後のあり方に、大きな示唆を与えているのである。